

苦野一徳 著

『「学校」をつくり直す』

河出書房新社、2019 年

256 頁、840 円（税別）

障がいのあるなしに関わらず、すべての子ども達が共に学ぶ「インクルーシブ教育」が謳われていることをご存知の方々も多いと思う。しかし、現実には以下の事態が起こっている。少子化にも関わらず、特別支援学校・学級に在籍する子ども達の数は増え続けている。公立の小・中・高校が統廃合で減少しても、特別支援学校は増加している。実際には、分離教育が進んでいないだろうか。そんな声も聞こえてきそうだ。

個人的な疑問から始めてしまい恐縮ではあるが、「さまざまな形で子どもたちを“分けて”いる現状とは異なる、「多様な人たちがもっと“混ざり合える”学校環境」を作りたいという筆者の主張、そしてそのための学校設立を目指しているという具体的な行動は、本来の意味でのインクルーシブ教育とも重なるのではないか、と感じている。

日本の教育システムは、極めて同質的な学習環境を志向している。「みんなと、同じことを、同じペースで、同質性の高い学級の中で、教科ごとの出来合いの答えを、子どもたちに一齐に勉強させる」システムは、やはり限界をきたしているのではないか。残念ながら、障がいのある、病を抱える、外国にルーツがある、貧困にある…そんな子ども達が、様々な支援が不十分なために学習に

参加できず、または同質的過ぎる雰囲気馴染めず、普通教育制度からこぼれ落ちてしまいやすい。そんな脆弱なシステムだと思えてならない。

そして、個々を尊重したい思いを強く抱いたとしても、教育現場に降りかかる業務過多と人手不足のため、現実には集団統率にかたよりがちな現状にも問題がある。しかし、筆者が批判しているのは個人や学校ではなく、あくまでシステムそのものである。それは、「困っている子」（「困った子」ではない）たちを置き去りにしかねないシステムなのだ。著者は小学校を念頭において執筆したと述べているが、本著に貫かれているこの主張は、評者が特別支援教育で感じている疑問とも、ピタリと重なる。

学校をつくり直す上で提案されている取り組みの一つが、「探求型の学び」をカリキュラムの中核に据えることである。子どもたちが自分自身で問いを立てる。個人で、またはグループ協働で、探求し、発表する。これを繰り返す。ここで問われるのは、関わる大人の態度であろう。子どもたちを信じる。そして、任せてみる。子どもたちが失敗し、迷ったとしても、安易に助け舟を出しては本人のためにならないと、声をかけようとする気持ちをぐっところえるべき時もあるだろう。しかし、見守ることに徹し、本当に必要な瞬間を捉えて手を差し伸べる。それは、見ぬふりして見るような、厚みのある眼差しである。根底にあるべきは、人間の潜在能力と可能性を徹底して信じようとする態度である。

また、公教育の本質として、「自由の相互承認」があげられていることも興味深い。「自由」を意味する liberal を英和辞典で引くと、まず「寛容」「偏見のない」「気前の良い」といった意味がでてくる

はずだ。例えば A person of liberal nature は「寛大な人」という意味である。自由と寛容は切り離せない。その意味で、「自由の相互承認」とは、子どもを一人の人間として尊重し、敬意を払うことと不可分である。なるほど公教育とは本来、寛容の精神に基づくのであろう。

辻明典（福島県立相馬支援学校）